

[Look down on NP] の概念研究

——認知言語学的アプローチ——

森 山 智 浩

1. 研究意義

森山（2016）では、[depend on NP] における形態と意味との関係を題材として、認知言語学的観点からその概念的結びつきを見つめることにより、語彙学習指導における照合フィルターとしての役割をも果たす言語学研究の位置づけについて論じた⁽¹⁾。もちろん、言語学研究の本来的目的は教育学的観点に根ざすものではなく、特に認知言語学では大脳内活動の一端を明らかにするために、その結果事象である言語事例の概念的側面をあぐまでも現象学・情報学のアプローチでもって論考する視座を有する。しかしながら、そうした概念の抽出方法自体は語句の意味論の実像を捉える上で有用であることから、そこには、昨今、教育番組や学習参考書などでよく見聞きする「イメージ」なるものの実体を精査し、学習者の知的欲求の充足をも視野に入れた語彙学習指導の実現に貢献することができる意義が存在していると考えられる⁽²⁾。我が国の多くの学習者のように、学習対

(1) 認知言語学（特に認知意味論）の諸理論を導入する意義とその有用性については、上野・森山（2007）、森山（2016）を参照。

(2) 誤解のないように述べておくと、「イメージ」を用いること自体の是非を問うているわけではなく、それを精査および発展改良するためのフィルターとして実学たる言語学の学術研究成果が如何にして語彙学習指導に貢献し得るのかという一つの可能性を提示したに過ぎない。なお、言語学から見た「イメージ」➤

象言語が学習者の母語体系と異なる場合、統語構造はもちろんのこと、意味生成のメカニズムにも学習者の関心が集まるのは必然のことであり、単一語の多義性や類義語間の意味論的相違、連語表現の意味のからくりなどを明らかにして語彙学習に還元しようとする潮流の中にあって、その語句概念抽出プロセスの精度が問われていると言っても過言ではなからう。

そこで、本稿も同コンセプトを踏襲し、軽視事象表示の「look down on NP」における形態と意味との関係を一例に挙げ、特に「なぜ on でなければならないのか」についての既存の捉え方に対する反証可能性を問う一方、認知言語学的観点からその概念的側面を見つめることにより、上述した照合フィルターとしての在り方を模索する⁽³⁾。

ㄨの厳密な定義について詳しくは、池上（1975：38-70）を参照（ただし、池上（1975）では、「イメジ」（image）と表記）。

(3) 「look down on NP」は「look down upon NP」とも表現し得るが、適宜、「look down on NP」の記載に統一して論を進める。英語前置詞uponはupとonとの複合体による（cf. *OED* (s.v. upon, prep.)）ものだが、たとえば、“There is a fly *upon* the floor [the wall / the ceiling].”と表現可能なことから明らかなように、この「上」とは必ずしも（重力方向による）客観的方向性に基づく空間関係づけとは限らない。つまり、ここでは、「壁」／「天井」の面をあたかも地面や床のように見立て、あくまでも「視点の移動」という認知パターンを交えることによって初めて、TR が各々の LM の「上面」に接触しているという認識的方向性が成立している。なお、英語前置詞 on, upon 各々の概念についてさらに詳しくは森山智浩・高橋・森山オアナ他（2006：133-135）を参照。

また、ここで「軽視事象表示」と表記したのは、以下〔1〕—〔2〕に見られるように、既存の書物内でもその対訳としての捉え方に揺れが生じていることに関連する。

〔1〕「軽蔑する」（despise）といった意味合いはない

— *GEJD* (s.v. look down on [upon] O)

〔2〕look down on [upon] 「...を見下す、...を軽蔑する」（=despise）

— 安藤（2012：166）

抽象的事象表示の「look down on NP」が「軽蔑」を含意するかどうか（もしくは対訳として相応しいかどうか）の議論を行うことが本稿の目的ではないものの、少なくとも行為者が被行為者を同格（もしくはそれ以上の格付け）と

2. 先行研究の考察

2.1. 「圧力」としての意味用法

2.1.1. 問題点

筆者が知る限り、現状、[look down on NP] の概念そのものを詳細かつ体系的に論考した学術研究は存在していない⁽⁴⁾。たとえば、Okuno (2014) では、英語前置詞 on に関する多義性のメカニズムを明らかにすることを試み、中核概念からの意味変化プロセスに光を当てながら豊富な事例分析がなされているものの、確認される限り、[look down on NP] については触れられていない。他方、近年、語句の多義性やその意義展開を簡潔に示そうとした辞書・辞典も散見されるが、これらも同様に、[look down on NP] において on が共起する概念的必然性について言及されている記載は見受けられない。たとえば、DELPA における on の事項では「〈人・物〉

ゝみながしてないという点であえて「軽視事象表示」とした。なお、構成性の原理に従い、despise の概念は [〈+LOOK DOWN ON〉・〈+DISLIKE〉] という意味素性の合算で捉えられ得る。その概念的差異を顕著に表す一例が、次の [3] である。

[3] Even though they like her personality, they always *look down on* / **despise* her for her inappropriate behavior.

他方、[look down on NP] の対義表現に相当するとみなされることが多い敬意事象表示の [look up to NP] の概念に関しては、下記 [4] における容認度の差からも示されるように、[〈+RESPECT〉・〈+HOPING TO BECOME LIKE〉] という意味素性の合算で表し得る。

[4] I *respect* /**look up to* his fighting spirit, but never have I aspired to become like him.

これら類義表現間の概念的相違を見つめることが本稿の目的ではないので、以上の考察で留めおきたい。

- (4) セイン・古正 (2014: 105) では「…を見くだす」として「look down at [on]」という記載が挙げられているが、通常、軽視事象表現には [look down on NP] の形態が用いられると考え、論を進める。

の表面に接して」という中核義から「[特性類似] 身体の一部に接して」, 「[特性類似] 活動・行為に接して」, 「[特性類似] 影響が人に接して」各々への派生義展開の観点に基づいてその多義性が眺められている一方、*DEWME* における同事項では「～の上に [の]」を一般義として「近接」, 「付着」, 「付属」, 「支持」, 「支え」, 「時間的接触」, 「(空間・時間的な場合以外の接触として) 根拠・基礎・条件・理由あるいは手段・器具」, 「動作・状態の進行中・最中」, 「運動の方向や目標あるいは動作の直接・観察の対象」, 「関係・従事・所属」などへの派生義展開が記述されている。しかしながら、確認される限り、いずれにもその具体事例に [look down on NP] の実例は掲載されていない⁽⁵⁾。

このような状況下、主に中等教育課程の英語学習者を対象として、学術研究の現状に先んじた見解が提示されている場合も少なくない。その一例が、以下(1)である。

(5) *DELP* は「一言で述べれば、個々の多義語に中心義を定め、そこから意義展開ボタンに基づいて意義展開を跡づけ、もって意味ネットワークの全体を記述する」(*DELP* (まえがき)) という方法論に則って編纂され、「メタファーなどの意義展開ボタンで多義語を包括的に記述した、初めての辞典」と謳われていることから、先行研究の一つとして扱うに値すると考え、論考を進めた。他方、*DEWME* は「本書では語義を「一般義」(最も普通の意味)と「その他」の二つに分けるだけで番号付けはせず、語義全体のつながりをできるだけ物語風に展開した、このようにすることによってある語の語義の全体像をかなり容易に見ることが可能になるのではないかと考えたからである」(*DEWME* (まえがき)) という主旨に則って編纂されていることから、同じく先行研究の一つとして扱うに値すると考え、論考を進めた。なお、「それらには単に実例として挙げられていないだけではないか」とする見方もあろうが、たとえば前者の書について、本論で引用した「[特性類似] 影響が人に接して」を [look down on NP] の on に適用したとしても、たとえば「それでは対義表現とみなし得る敬意表示の [look up to NP] ではその影響が常に対象者に接しなくとも良い理由は何か、また、軽視事象表示の影響のみが常に対象者と接しなくてはならない理由は何か」など、種々の問題が生じてしまう。

- (1) …例えば on。みなさんご存じのこの前置詞，単に「～の上」という日本語で考えてはいませんか？それじゃ She looks down on me. (私を軽視している) とか She cheated on me. (彼女が浮気をした) で，なぜ on が使われるかわからないでしょう？感覚として取り込まなければ，結局は付け焼き刃に終わってしまうんですよ。on という前置詞には，「圧力」が感じられることがよくあります。「上に何かが載っていると下にあるモノは圧迫される」，そういうところからでてくる感覚なのですが，これがかめると，look down on, cheat on だって見えてくる。そう，軽視されたり浮気をされたりするとググッと心に圧力がかかってくるでしょう？その on なんですよ。

—TOSHIN TIMES on Web, 「憧れの職業を追え！言語学者編」

(アクセス日：2015年8月23日) (一部省略・下線筆者)

この記事は「言語学者になるために必要な資質を1つ挙げるとしたら、『当たり前なのかに潜む問題を発見する力』です。少しでも心にひっかかることがあったら，虫眼鏡を取り出して『これはどういうことだろう？』とこたわり追求すること。それが言語学者に限らず研究者一般の基本姿勢だと思います。…」(一部省略筆者) と結ばれており，そのコンセプト自体には共感を覚えるばかりであるものの，on の意味用法に関する説明内容については議論の余地が多分に残る。また，同記事の見識は次の (2 a-b) などにも共有されている。

- (2) a. 基本イメージから「圧力」へ

A : Midori has been looking very down recently.

B : Well, she has a lot on her mind at the moment.

⋮

「悩んでいる」, なぜこんな意味になるのでしょうか。その秘密はやはり基本イメージにあります。

基本イメージをよくながめると, 上の球が下にぐいっと「圧力」をかけているように見えてきませんか? ほら, her mind に a lot が大きな圧力として, のしかかっています。「気にかかっている」「悩んでいる」, そんなニュアンスです。…

What impact will the new Pope have on the Catholic Church?

⋮

ここはやっぱり on じゃなくてはいけない, そう感じるでしょう? なにしろ impact (衝撃) ですからね。衝撃になって影響を及ぼす——「力が加わっている」感じ, それが on を呼び込みます。effect... on (効果), influence... on (影響), emphasis... on (強調), concentrate on (集中する) などなど, これまで「熟語」として丸暗記してきたことが何の苦労もなく一挙にスッと理解できるでしょう? イメージさえ正しくつかんでしまえばもう丸暗記はいりません。

—大西・マクベイ (2006: 15) (一部省略筆者)

b. ⑤派生イメージ 圧力

この使い方をご存知の方はあまりいないようです。もちろんネイティブが日々使っている重要な使い方の1つなのですが, 紹介する人がいないので意識もされず, 結果としてうまく使える人が少ないのです。次の文を見ましょう。

The Gulf War had a great influence on the Iraqi economy.

⋮

Tiger Woods has had a tremendous effect on the game of golf.

⋮

Let's concentrate on this topic.

⋮

この on は「圧力の on」と呼ばれています（5年前、私が勝手にそう呼ぶことに決めました）。基本イメージに立ち返ってください。ジッと見ていると上の丸が下の四角を「押している」ように見えるでしょう？この連想から on には「グリグリと圧力をかける」イメージが生まれます。上の文はどれもある種の圧力が Iraqi economy, the game of golf, this topic に向かっていることを感じさせますね。

—大西・マクベイ（2009: 93）（一部省略筆者）

上記は学習参考書の内容であり、厳密さを求める学術研究の成果が活かされたものではないとする見方も可能であろう。また、複雑な説明より簡易な見方の方が特に初修学習者に都合が良いというケースもあるかもしれない。上記で鳥瞰したように、こと [look down on NP] の概念に至ってはその学術研究が進んでいない責もある。しかしながら、特に「こだわり追求すること」をテーマに専門的知見を導入するのであれば、なおさら誤解を与えるような不確かなものを厳密な検証なくして提供してもよいという論理は成り立たない。それによって、語用能力育成などの今後の学習内容の発展・活用に影響を与えるばかりか、不明瞭な理解（もしくは核心に至らない理解）のまま学習を進めることで対象言語の意味論的特性を把握できず、母語との異同を参照するような言語学習の醍醐味をも失いかねないからである。誤解のないように再度述べるが、本稿では「イメージ」なるもの自体の是非を問うているわけではない。学習者の母語とは異なる構造を持つ学習対象言語に対し、語句の多義性や連語表現の意味のからくりを

提示することで、学習者の知的好奇心をも満たそうとする語彙学習指導の実現に向けた取り組みは評価されるべきものである。そうではなく、そのようなイメージなるものが如何なる論拠でもって導き出されたかという「抽出プロセス」の在り方とその再現性を議論しているだけである。こうした理念も踏まえた上で、上記(1)―(2)を眺めると、主に、下記(3 a-b)のような問題点が浮かび上がる。

- (3) a. まず、前者(1)では、“She cheated on me.”を実例として挙げ、
「onという前置詞には、『圧力』が感じられることがよくあります。『上に何かが載っていると下にあるモノは圧迫される』、そういうところからでてくる感覚」がそこに反映されていると解釈されている。しかしながら、そもそも、「浮気する」事象がPATIENTに「心理的圧力をかけている」とするならば、“to be unfaithful to your husband, wife, or sexual partner by *secretly* having sex with someone else” (LDCE (s.v. cheat on somebody) (イタリック体筆者))とする定義上との整合性が成り立たない。「心理的圧力をかけられている」と感じるには、少なくとも、その PATIENT が AGENT の浮気事象を「既知」とする命題を満たさなければならないからである。また、「AGENTが浮気をする＝PATIENTは心理的圧力を受ける」という等式が成立するのであれば、cheatを(onが現れないという形態上の対比として)他動詞で用いた場合には「AGENTが騙す＝PATIENTは心理的圧力を受けない」という等式が同時に存在しなければならないが、少なくとも筆者にはそのような感覚は持ち得ない⁽⁶⁾。

(6) 紙面の都合上、[cheat on NP]のさらなる概念については別稿にて改めて

- b. 次に、後者(2)でも on が「圧力」なる意味用法も表示すると
して種々の実例を挙げ、「イメージさえ正しくつかんでしま
えばもう丸暗記はいりません」、「もちろんネイティブが日々
使っている重要な使い方の 1 つなのですが、紹介する人がい
ないので意識もされず、結果としてうまく使える人が少ない
のです」といった文言が並び立てられている。しかしながら、
これらの on の語用は、既存の意味用法内で説明し得るもの
ばかりに感じてならない。たとえば、Okuno (2014: 74) で
は、こうした意味用法は “Exerting Force” と名付けられつ
つ、“When we exert force on something, we do it ‘on’ the
surface of it.” (イタリック体筆者) と既存の枠組みの中で分
類されるに留まる。

2.1.2. 従来の意味論的枠組みにおける解決案

まず、2.1.1.(3b)の問題点に目を向けてみよう。以下(1)の複合概
念構造における図地分化認識には、on それ自体に「圧力」などといった概
念が包含されていないことが確認される⁽⁷⁾。

- (1) English *on* in its central sense is a composite of *above*, *in contact with*, and *supported by*. Each of these is an elementary spatial relation.

—Lakoff and Johnson (1999: 31)

↘議論したい。

- (7) 本論 2.1.2.(1)で記されている“ABOVE”は概念上の方向性、すなわち LAND-MARK の「面上（もしくは線上）」という点での空間方向性を指しているだけであって、いわゆる前置詞 *above* の概念との等価性を意味しているわけではない。また、ここでの「面上」認識は「視点の移動」の認知ボタンも関与する。

この点で、2.1.1.(3b)内で触れた、“When we exert force on something, we do it ‘on’ the surface of it.”(Okuno (2014: 74) (イタリック体筆者))と既存の枠組みの中でその意味用法を分類しているアプローチはまさに妥当であると言える。たとえば、2.1.1.(2a)で挙げられている“emphasis...on”を一例に挙げて述べると、この事象表示に [put emphasis on NP] も適用可能であり、これが [put _[physical] THEME on NP] を根源領域 (SOURCE DOMAIN) にしたメタファー的拡張によることを考慮したとしても、言語世界の認識上、「圧力」なる概念とは直接的な接点は持ち得ない。恐らく、そうした誤解は「強調(する)」もしくは「強調を置く」という日本語訳からの語感に基づくためであろうが、そもそも emphasis は “an appearing in, outward appearance” (cf. *OED* (s.v. emphasis, *n.*)) の意に遡及する、いわゆる「視覚認識」に基づく語である。つまり、あくまでも「明瞭な輪郭を持つことでくっきり見えるようにする；(或る部分に絞るために) 明瞭な輪郭を設ける」という「出現；目立ち」概念によって強調を表示する語であって、emphasis の指示事物それ自体に「圧力」なるものが包含されているわけではない。また、たとえ、類義表現の [put stress on NP] からの類推だとしても、その感覚が生じしてしまうのは stress それ自体によるものであり、on そのものは依然として上記(1)に見られる概念しか持ち得ない。このことは、2.1.1.(2a)で見られた impact についても同様で、impact それ自体が “press closely into something” (cf. *OED* (s.v. impact, *v.*)) の意に遡及することが on の意味概念を混同させる要因を生んでいると考えられる。ましてや、同節(2a-b)で見られた influence, effect などでは、その直接的影響 (DIRECT INFLUENCE) が対象物に及ぶ認識を「接触 (IN CONTACT WITH)」として捉え、on で表されているにしか過ぎない。各々が “streaming ethereal power from the stars acting upon character or destiny of men”, “execution or completion (of an act)” (cf. *OED*

(s.v. influence, effect, *n.*)) の意に遡ることからも明らかなように、両語句自体における原義概念にも「圧力」を生む要素は確認されない⁽⁸⁾。

さらに、以上の表現群の中でも、[put NP₁ on NP₂] の形態から得られる概念に議論を絞ってみよう。結果から言えば、名詞化することで抽象的事物として認識されるようになったといえども、stress や emphasis といった名詞句 (NP₁) 表示の直接的影響を LANDMARK としての与格名詞句指示物 (NP₂) に及ぼすには、それに「接触」しなければならない、という我々の経験則内に留まる。つまり、NP₁ の語句概念に「圧力」があらうとなかろうと、従来のプロタイプ理論 (PROTOTYPICAL THEORY) の単一的範疇に収まるべきものである。また、たとえ上述(1)における “SUPPORTED BY” の概念に焦点を絞ったとしても、依然として on それ自体が「圧力」概念を持ち得るという解釈には至らない。その理由を確認するために、次の(2)―(3)の捉え方に目を転じる。

(8) 前者の原義概念における “ethereal power” がたとえ「圧力」を（わずかならがでも）伴う指示物を表示するとみなしたとしても、言語世界の認識上、on それ自体が「圧力」概念を包含するかどうかの議論には至らない。同様のことは本論 2.1.1.(2)における “Well, she has a lot on her mind at the moment.” への解釈についてもあてはまり、これを「心理的圧力の on」とすると、たとえば “... but she doesn't feel any pressure for today's presentation.” といった表現を後続させた場合、「その圧力とは何か」にまで議論を拡大せざるを得なくなってしまう。そうではなく、以下 [1] と同様、ここでも一貫して “IN CONTACT WITH” としての概念が作用しているに過ぎない。

[1] Clone: Broadside, if we make it through this one, drinks are on me.

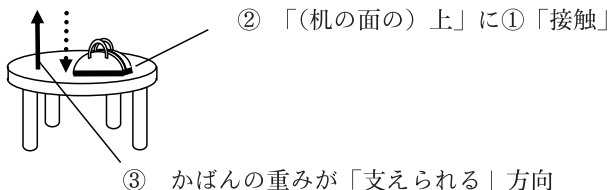
—TV ドラマ *Star Wars: The Clone Wars* (2008), Episode: Shadow of Malevolence (2008) <00:08:08> (イタリック体筆者)

(2) a. That heavy bag was *on* the table.

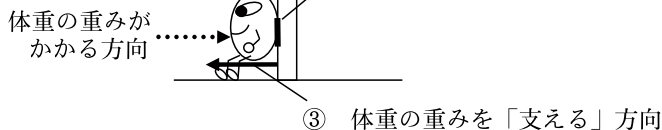
b. He leaned *on* the wall.

—上野・森山・福森・李 (2006: 717) (一部変更筆者)

(3) a. かばんの重みがかかる方向



b. ② 「(壁の面の) 上」に①「接触」



—上野・森山・福森・李 (2006: 717) (一部変更筆者)

ここでは、現実世界と言語認識世界との捉え方の差にも言及されている。つまり、前者の世界では、各々、THEME の指示物の「(物理的) 重み」が LANDMARK にかかっていることは疑いようがなく、この点も参考に 2.1.1. (2 a-b) では「圧力」なる意味用法への転化を挙げていると推測される。しかしながら、後者の世界での「重み」とはあくまでも SUPPORTED BY (支えられて) の前提条件にしか過ぎず、言語認識の世界では、その重みによる THEME の運動が LANDMARK による同じ力学量でもって「拮抗」していることに焦点が当たっている。事実、上記 (2 b) では、動詞 *lean* の特性により、さらにこの力学上の拮抗認識がより前景化され、「対抗」概念表示でもって [lean against NP] と表現されることもこの捉え方の妥当性を物語っている。見方を変えると、それだけ「圧力」なるものが強調される

2.1.1.(3b) の捉え方が言語認識の世界で成立するのであれば、それとペア概念になる“SUPPORTED BY”が非常に色濃く前景化される以上、[*emphasis NP₁ against NP₂] や [*cheat against NP] などという形態も同事象表示に自然な表現として存在していなければ論理に適わない⁽⁹⁾。ここから検討すべきことは、「語句の概念を正しく捉えるには、その前提条件として『連続体である現実世界と（それを区分する）非連続体である言語世界とを混同せずに区別しなければならない』という言語学研究における捉え方の重要性」についてである⁽¹⁰⁾。もし、そのような区別がなくなってしまうと、「置く／設置する」なども含めた「重力」方向に沿う現実事象表示はすべて「圧力の意味用法に関る」となりかねない。そればかりか、たとえば「[hit on NP] や [beat on NP], [knock on NP] といった動詞句における on は『打撃概念の on』, 「[fall on NP] や [drop on] といった動詞句における on は『落下概念の on』」など、共起する語句の概念に応じて無数に意味用法を設けなければならないことになる。このような分類設

(9) [lean on [against] NP] の概念について、さらに詳しくは森山 (2016) を参照。

(10) 本論の第一章でも触れたように、認知言語学（特に認知意味論）では大脳内活動の一端を明らかにするために、その結果事象である言語事例の概念的側面をあくまでも現象学・情報学のアプローチでもって論考する視座を有している。したがって、その視座からは、現実世界における我々の知覚および肉体経験を通して、さらには社会・文化的な環境との相互作用によって得られた「経験のゲシュタルト (EXPERIENTIAL GESTALT)」(cf. Lakoff and Johnson (1980: 117-118)) を基盤の一つとして言語活動（特に意味論的側面）が営まれているとみなされることとなるが、ここで言う「現実世界とのつながり」と本論で述べた「連続体である現実世界と（それを区分する）非連続体である言語世界との区別」とは根本的に議論の次元を異にする。つまり、前者の立場では、語句（さらには構文）の意味概念が既得の経験即による知識の枠組みに基づき、如何に範疇化され、その全体像のどの部分が如何に前景化し、ひいては、如何なるプロセスを通して反映されるかが議論されている。それに対し、後者の立場では、連続している現実世界を認識世界では如何に区切って表現しているかが論点となっているだけであり、双方の立場に矛盾はない。

定を際限なく推し進めることは、まさに、無限の意味世界を有限の道具立てで表現しようとする我々の大脳内活動にそぐわない結果をもたらすばかりである。さらに、こうした「圧力」なる意味用法が許容されるのであれば、以下(3)における斜体部分も同様の解釈となってしまう。

(4) Robert: Mine was some Tarly boy at the battle of Summerhall.

My horse took an arrow, so I was *on foot* slogging
through the mud.

—TV ドラマ *Game of Thrones* (2011),

Episode : Lord Show (2011) (イタリック体筆者)

しかしながら、上記(4)が表す事象は、泥中を移動するために「馬の上に身体全体（典型的な接触部位は臀部）を接触させ、それを支えて乗せていく (ride (on) a horse)」代わりに「自身の足にそれ以外の身体全体を接触させ、それを支えて乗せていく」という、或る種の乗物概念を加味した図地分化 (FIGURE / GROUND SEGREGATION) 認識に基づいており、on それ自体には主に “SUPPORTED BY; BASED ON” の概念が直接的に反映されているだけであって、言語認識の世界上、「圧力 (PRESSED BY)」のイメージなどとは無関係である⁽¹⁾。

(1) このような図地分化認識に基づく他の英語表現として [lie on one's back [stomach]], [stand on one's hands], [walk on one's hands and knees] などが挙げられる。また、たとえば “She has a cute face.”, “She grabbed the ladder with her both hands.” など、言語認識の世界上、ここでの she がそれぞれ、「a cute face / her both hands 各々の指示物を除く全体」を指示する機能を持つという点では、同様の範疇に収まる表現群とみなし得る。

2.2. 再び [look down on NP] における形態と意味との関係の問題へ

2.1.では、言語認識の世界上、英語前置詞 on それ自体には「圧力」概念が帯びる余地はなく、わざわざ新しい意味用法を設けて逆に学習負担を増やす必要性がないどころか、既存の意味論的枠組みの中でその理解を促進することができる実証を行った。それでは、2.1.1.(1)でも触れられている [look down on NP] の on については如何なる概念で捉えられるかが次の論題となろうが、前述したように、筆者の知る限り、詳細かつ体系的にそれに焦点を当てた学術研究は存在していない。

そこで、まず、英語前置詞 on それ自体には「圧力」概念が帯びる余地がない事実をあえて鑑みずに、2.1.1.(1)で言及されている同概念が [look down on NP] に反映されていると仮定してみよう。その場合、2.1.2.(1)―(3)の論理に基づき、たとえ視覚や触覚で捉えられない抽象的事象であってもメタファー的拡張の観点からは LANDMARK としての与格名詞指示物による “SUPPORTED BY” の概念が包含されていなければならない。換言すると、もし「圧力」認識が [look down on NP] に色濃く反映されているとするならば、言語認識の世界上、プロフィールされた参与者の関係として「TRAJECTOR による PRESSED BY \Leftrightarrow LANDMANRK による SUPPORTED BY」双方の力学量が心理的であれ「拮抗」することがその命題を真として満たす必要条件となる。故に、以下(1 a-b)のような実例は容認不可と見なされなければ論理に適わないが、事実はその逆となる。

- (1) a. I heard that he looked down on Mary *though she didn't realize it.*
- b. He always looks down on Mary *without her being aware.*

また、LANDMANRK による「対抗」認識が必要条件となるのであれば、特殊

な文脈（たとえば、見下される「不特定多数の人々の一人ひとり」がその心的圧迫なるものに拮抗するだけの心的状態を表す文脈）が存在しない限り、そこに総称名詞句は適用し難いはずである。しかしながら、この視点の導入も結果は予想に反するものとなる。次の（2 a - b）がその実例である。

- (2) a. Kim: I asked because I was really curious. Why do you have to use violence? I'm not the type of person who looks down on *people* who aren't smart.

—TV ドラマ *Sikeurit Gadeun* (2010), Episode: One (2010)

- b. Frances: Do you look down on *all women* or just the ones you know?

—映画 *In a Lonely Place* (1950) (イタリック体筆者) <00:06:46>⁽¹²⁾

そもそも、メタファー的拡張の観点からは、写像関係にある根源領域の中核概念がその目標領域 (TARGET DOMAIN) に投射されることが常である一方、根源領域の中核概念と何ら関係のない概念がその写像先としての目標領域の中核に忽然とその姿を現すということは言語の経済性に反する。つまり、たとえば下記(3)のような文が表す事象に「視覚的圧力」が存在していないにも拘わらず、比喩的転移を通した軽視事象表示の [look down on NP] に忽然と「圧力」なるイメージが現れるというのは、もはやメタファー的拡張とも言い難い。

(12) 〈 〉内の数字はそれぞれ、その台詞が当該映画 DVD 内で生起する〈時間・分・秒〉を表す。なお、TV ドラマの場合は生起タイムを記載しない。以下同様。

- (3) I was just *looking down on the lake* from the top of the cliff
absentmindedly.

さらに、通時的見地に立脚しても結果は等しくする。なぜなら、以下(4)に記されるように、軽視事象表示の [look down on NP] における初出例では「無生物」の与格名詞句を従えており、その指示物に心理的圧力をかけること自体に必然的理由が見出されないからである。

- (4) fig. to look down on, upon: to hold in contempt, to scorn; to consider oneself superior to. 1711 ADDISON *SPECT.* No. 255...
A solid and substantial Greatness of Soul looks down with a generous Neglect on the Censures and Applauses of the Multitude.

—*OED* (s.v. look down, 33 b) (一部省略・下線筆者)

なお、同様の点は現代英語にも当てはまる。次の(5)がその実例である。

- (5) Harriet pretends to *look down on* football, but she never refuses a date with a foot-ball player.

—*ADEIE* (s.v. look down on [upon] someone [something]) (下線筆者)

以上の論考を踏まえ、軽視事象表示の [look down on NP] における on に「圧力」概念が関与していないとすると、既存の意味論的枠組みの中では如何に対処することができるかが次の議論となろう。そこで、もう一度、2.1.2.(1) (以下(6)として再掲) に目を向けてみる。

- (6) English *on* in its central sense is a composite of *above*, *in contact with*, and *supported by*. Each of these is an elementary spatial relation.

—Lakoff and Johnson (1999: 31)

Lakoff and Johnson (1999) では、認知意味論のアプローチでもって *on* の中核概念に触れ、“ABOVE”, “IN CONTACT WITH”, “SUPPORTED BY” の3種類の複合概念によって成立していると述べられている。ここに言葉を補足すると、下記(7 a-b)に示されるように、事象表示によってはそのいずれかが前景化される（もしくは複合的に前景化される）という図地分化の特性も併せ持つ⁽¹³⁾。

- (7) a. The village is located *on the lake*. [IN CONTACT WITH]
b. My horse took an arrow, so I was *on foot* slogging through the mud. [ABOVE, INCONTACT WITH, SUPPORTED BY]

しかしながら、いずれの事象表示であっても、英前前置詞 *on* が用いられる限り、具象的であれ抽象的であれ、通常、そこには与格名詞指示物との何らかの「接触」認識が不可欠な要素となる。それ故、その複合概念構造の中であえてさらなる中核をなす概念を一つ挙げるとするならば、それは“IN CONTACT WITH” であると言わざるを得ない。

(13) “ABOVE” の概念素性については「視点の移動」の認知ボタンも関り、あくまでも“IN CONTACT WITH” の方向性に言及されているだけであることから、筆者が知る限り、“IN CONTACT WITH” の概念素性が取り除かれて) その方向性の概念だけが抽出され、前景化するような事例は存在していない。副詞用法の *on* についても同様である。詳しくは上野・森山・福森・李 (2006: 855-856) を参照。

以上の概念的捉え方を軽視事象表示の [look down on NP] に適用した場合、そこには「TRAJECTOR による LANDMARK への視線の接触」、いわゆる「視線方向の固定化」という考え方が浮上する。つまり、以下(8)に見られる表現群、ならびに、次の(9)に見られるその拡張表現群と同一もしくは類似の範疇に属するという考え方である。

(8) [fix [set] one's eyes on NP], [keep an eye on NP] …

(9) [look on NP], [focus on NP], [concentrate on NP] …

この考え方に基づけば、一見、[look down on NP] におけるメタファー拡張の流れにも違反せず、理を成しているかのように捉えられるかもしれない。しかしながら、その一方で、新たな問題も生じる。「それでは、(その対義表現にみなし得る) 敬意事象表示の [look up to NP] ではなぜ on が用いられないのか」という問題である。換言すれば、「軽視事象表示に LANDMARK への視線方向の固定化が常に要求されるのであるならば、なぜ敬意事象表示にはその固定化が常に不必要であるのか」という整合性の問題、さらには「そもそも、軽視事象表示にその固定化が常に必要であるのか」という根源的な問題さえも生じ得る。これらの問題の浮上は至って妥当であり、我々の日常経験を振り返っても、その必要性にこだわる必然的理由は存在していない。となると、2.1.1.1 で見た新しい意味用法を設ける手立ても筋をなさず、他方、既存の意味論的枠組みの中だけでも解決し難い。そこで、前述(6)の複合概念が on に反映されているとする認知意味論の視座を一貫するのであれば、既存の意味論的枠組み内での捉え方をあくまでベースにしながらも、そこに新しい捉え方を加味することでその解決法を探るスタンスを採るべきであろう。その新しい捉え方とは、現象学・情報学の論拠に基づいた我々の「視覚経験」である。詳しくは、次章に論

を譲る。

3. 視覚経験に基づいた [look down on NP] の概念

3.1. [look down on NP] の史的変遷

2.2.(4) (以下(1)として再掲)に記される通時的観点に立脚しても、軽視事象表示の [look down on NP] は、「見下 (みお) ろす」という視覚認識を根源領域として比喩的に転化した、いわゆる「見下 (みくだ) す」概念を表示していることが確認される。

- (1) fig. to look down on, upon: to hold in contempt, to scorn; to consider oneself superior to. 1711 ADDISON *SPECT.* No. 255... A solid and substantial Greatness of Soul looks down with a generous Neglect on the Censures and Applauses of the Multitude.

—*OED* (s.v. look down, 33 b) (一部省略・下線筆者)

こうした通時的意味変化を簡潔にまとめて軽視事象表示の [look down on NP] に触れようとする学習参考書も少なくないが、筆者の知る限り、on が共起しなければならない妥当な概念的理由については依然として見受けられない。次の(2)がその一例である。

- (2) Have you ever *looked down* at the city from the top of a building?
「うつむく」という意でも使える。「……を軽視する」の意の look down on... は比喩的展開の例。

紙面の都合上の問題もあるかと思われるものの、上記(2)のような解説の提示の仕方だけであれば、「それでは、『……を軽視する』の意を表示するために、一般的にはなぜ [look down at NP] の形態が宛がわれないのか」という新たな疑問も生み出しかねない。そこで、まず、具象物を捉える視覚領域そのものの概念化についての考察から始める。

3.2. 視覚領域の概念化

そもそも、我々の視覚領域は、「存在のメタファー (ONTOLOGICAL METAPHOR)」という比喩のフィルターを通し、三次元空間として捉えることが可能である。下記(1)がその詳細である。

- (1) We are physical beings, bounded and set off from the rest of the world by the surface of our skins, and we experience the rest of the world as outside us. Each of us is a container, with a bounding surface and an in-out orientation. We project our own in-out orientation onto other physical objects that are bounded by surfaces. Thus we also view them as containers with an inside and an outside. Rooms and houses are obvious containers. Moving from room to room is moving from one container to another, that is, moving *out of* one room and *into* another. . . .But even where there is no natural physical boundary that can be viewed as defining a container, we impose boundaries-marking off territory so that it has an inside and a bounding surface-whether a wall, a fence, or an abstract line

or plane.

—Lakoff and Johnson (1980: 29) (一部省略筆者)

ここでは、皮膚を境にして「内—外」の空間関係 (SPATIAL RELATION) を本来的に持つ我々の肉體経験を基に、具象的事物であろうと抽象的事物であろうと、明確な境界線を持たないもの (もしくはモノ) にもその方向性を投射することで対象事物の実体を捉えようとする、大脳内の営みの一端について記述されている。この認知活動を活用すると、我々の視界領域もまるで明確な境界線を持つ三次元空間であるかのように概念化され、境界線に囲まれた領域が「容器」、その内側に存在するものは「内容物」として捉えることが可能となる。その認識が言語活動して具現化された事例の一つに、まず、以下(2)が挙げられる⁽¹⁴⁾。

(2) The steamboat was *coming into sight / view*.

「三次元空間内部への移動」概念表示語 *into* と「視界」の意の *sight / view* との結合体に *come* が共起することにより、「内容物が視界という容器の中に存在するようになる状態変化」が表されるのであれば、各々に対極に位置する概念表示語を用いた場合、必然的に「内容物が存在しないようになる状態変化」が示されることになる。その事例が次の(3)である。

(3) The steamboat was *going out of sight / view*.

(14) なお、この容器空間として概念化される視覚領域において、その内容物である被知覚事物群は図地分化認識に基づいて識別される。同認識による「目立ち」概念について詳しくは森山 (2008a) を参照。

さらに、上記(2)―(3)の「状態変化後の事象」、すなわち「到達後の存在位置」を示す言語実例がそれぞれ、下記(4)―(5)であり、

(4) The steamboat was *in sight* / *view*.

(5) The steamboat was *out of sight* / *view*.

その視界空間の「中央」に内容物が存在すれば、必然的に「よく見えている」事象が表される一方、視界空間内部に何も内容物が存在しなければ、「何も見えない」事象が示されることになる。その実例が各々、以下(6)―(7)である。

(6) The steamboat was *in the center of my field of vision*.

(7) *There was nothing in sight* / *view*.

なお、次の(8)のような文脈において、“Look out!” が「危ない！」などと解釈されるのも同様の概念化によっている。

(8) Doc: Besides, the stainless steel construction made the flux dispersal... *Look out!*

—映画 *Back to the Future* (1985) 〈00:23:14〉(イタリック体筆者)

我々が日常生活で「危ない！」と叫ぶのは、危険な状態にあることに対する注意を喚起させる場合である。また、物体が視界の中に入って初めて我々はその存在を認識することも既に述べた。ということは、危険な状態であることを人に呼び知らせるときは、その危険物が視界領域の空間内に捉えられていないときであると言い換えられる。裏を返せば、その人は危

陰物以外のものを同空間内に捉えているということでもある。つまり、英語動詞 look は、たとえば “Look up at the picture.” (顔を上げて絵に視線を向けなさい) のような「…に視線を向ける」が中核義で、「(視線を向けた物を) 見続ける (例: He was *looking* at the picture.)」が派生義であることを念頭に置けば、“Look out!” と発声されるには、下記(9)を伝えたいからであり、

- (9) 「今、或る物体を捉えている『視界 (sight)』の中から外へ (out) 視線を向けよ (look)」

この概念化の存在が look (視線を向ける) と out (<out of 三次元内部から外部へ) の二語を結合させる必然性に至らしめると考えられる。

3.3. 視覚領域における2種類の下降認識

3.2. の論考を踏まえると、具象的事物の知覚を表示する [look down at NP] の概念は、以下(1)で捉えられる。

- (1) 具象的事物の知覚を表示する [look down at NP] の概念：
「三次元空間として概念化される視覚領域を背景に、NPの指示物に向けて視線を下降させる」

つまり、3.2.(8)―(9)では、視覚領域内の視線それ自体の移動の方向性は限定されず、現行の視界空間の「外」に視線を向けさせることで知覚外の事物を捉えさせようとする働きが確認された一方、ここではその方向性が限定されつつ、「内―外」の空間対立が包含されていないことが文字通りには(すなわち、文脈依存でない形では)そのような働きを示すまでには

至っていない。しかしながら、この「視線の下降」には注意を要する。なぜなら、次の(2)―(3)各々に示されるように、[look down at NP] で表される具象的事物の知覚には、大別して「2 種類の視線の下降」が存在しているからである。

- (2) Diane: Believe it or not, I actually thought about throwing myself in the lake. But then I looked down at this cat in my lap and I thought, who would take care of Elizabeth ?

—TV ドラマ *Cheers* (1982), Episode:

Let Me Count the Ways (1983) (イタリック体・下線筆者)

- (3) Superman: This is the hardest thing I've ever had to say: I'm guilty, we're guilty of the sin of hubris. We had the best of intentions to be Earth's guardians, to keep you safe, but we failed you. We look down at the world from our tower in the sky, and let our power and responsibility separate us from the very people we were suppose to protect.

—TV ドラマ *Justice League* (2001), Episode:

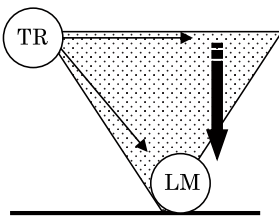
Divided We Fall (2005) (イタリック体・下線筆者)

つまり、いずれも 3.2. で観察した視覚領域を背景にした表現であることから、前者(2)の下線部における [look down at NP] が「TRAJECTOR の存在位置における現行の視界領域の中で（観察者の顎を引かずに）視線を下降させる」もしくは「TRAJECTOR の存在領域棚の下部レベルの高さにまで（観察者の顎を引いて）視界領域そのものを下降させる」という概念化で捉えられるのに対し、後者(3)のそれは「TRAJECTOR の存在領域棚よりもさらに

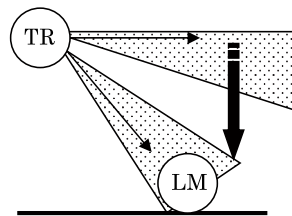
下の領域柵まで視界領域そのものを下降させる」という概念化で理解される。このような2種類の概念化をそれぞれ、下図(4)―(5)のイメージ・スキーマ (IMAGE-SCHEMA) で描く。

(4) 具象的事物の知覚を表示する [look down at NP] の下降概念パターン 1

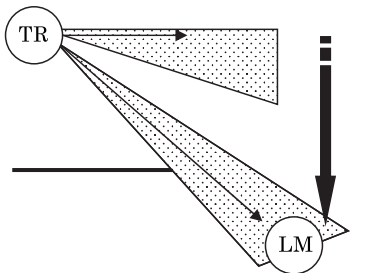
a.







b.



(5) 具象的事物の知覚を表示する [look down at NP] の下降概念パターン 2



- ・ここでの TR は厳密には AGENT の頭部の位置を示す。
- ・ は視界領域を示す。
- ・ は視線の位置を示す。
- ・ は視線もしくは視界領域の移動方向を示す。
- ・ は TR が存在する地面や床面などの底部の仕切り (= 存在領域柵) を示す。

これに対して、実は、具象的事物の知覚を表示する [look down on NP] の概念は同表示の [look down at NP] のそれとは、通常、合致しない。なぜなら、たとえば上述(2)―(3)の下線部（以下、それぞれ(2')―(3')と再掲）において、

(2') I *looked down at* this cat in my lap.

(3') We *look down at* the world from our tower in the sky.

次の(4)―(5)に示されるように、各々の at を on に置き換えた場合、その容認度に明確な差異が生じるからである。

(4) *I *looked down on* this cat in my lap.

(5) We *look down on* the world from our tower in the sky.

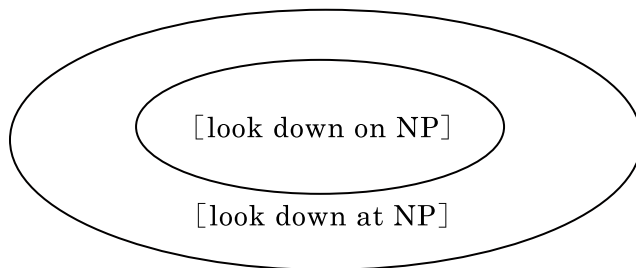
加えて、3.1.(2)（以下(6)として再掲）の実例も活用すると、上記(5)のように on を用いて(6')としても容認可能な表現と見なされる。

(6) Have you ever *looked down at* the city from the top of a high building?

(6') Have you ever *looked down on* the city from the top of a high building?

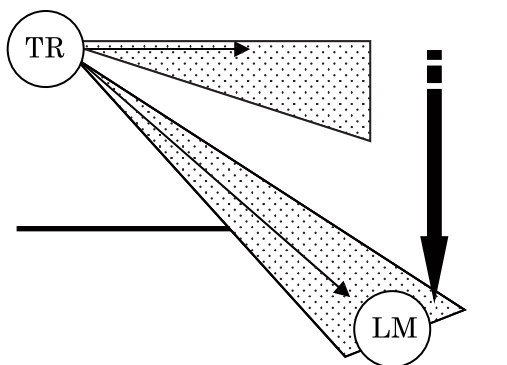
これらの言語事実から、徐々に [look down on NP] の概念の実像が見えつつある。その重要な点とは、具象的事物の知覚を表示する場合、下図(7)に描かれるように、[look down at NP] と [look down on NP] は各々の表現領域に関して「包含関係」にある、ということ、

(7) 具象的事物の知覚表示における各々の表現領域⁽¹⁵⁾



すなわち、同表示の「look down on NP」の概念は、前述(4)―(5)のうち、通常、以下(8)図として後者のみの概念を表示する力しか持たない、ということである。

(8) 具象的事物の知覚を表示する「look down on NP」の概念パターン



したがって、以上が意味することは次の(9)となる。

(15) この包含図は、あくまでも具象的事物の知覚表示に限定されるものであり、敬意事象表示の包含関係を表しているわけではない。具象領域の概念対比関係がなぜ抽象領域のそれに受け継がれなかったかについて詳しくは本論にて後述。

- (9) 具象的事物の知覚を表示する事象について、[look down on NP] で表現できるものは (subtle pair としての細かな概念的差異は別にして) [look down at NP] でも表現可能である。逆に言えば、前後のコンテキストで特定化されない限り、「TRAJECTOR の存在領域棚よりもさらに下の領域棚まで視界領域そのものを下降させる」という上図(5)および(8)の概念にのみ限定して表示するには、[look down on NP] の形態を用いざるを得ない。つまり、[look down at NP] の形態それ自体は、AGENT と与格名詞句指示物との各々の「(床面・地面などの仕切りを基準にした) 存在領域棚の差」だけを限定して示し得るような概念を持たない。

ここでようやく、軽視事象表示における [look down on NP] の概念が明らかとなる。2.2.(2 a-b) の実例を挙げたときにも言及したが、認知言語学の枠組みにおいてメタファー的拡張を視野に入れた意味変化の流れを捉える際、抽象的事物・事象を表示する目標領域を構造化させるメカニズムを明らかにするには、その写像元となる根源領域の概念を徹底的に見つめなければならない。具象的事物の知覚を表示する [look down on NP] の中核に「視線の圧力」などというものが反映されていないのだから、軽視事象表示の [look down on NP] に「心理的圧力」などというものが忽然と現れる論理は成立し得ない。また、主に現象学の諸理論に論拠を置く認知意味論の本質は、身体活動、知覚器官、さらには社会・文化環境との相互作用を通して得られた「人間の本性の産物 (products of human nature)」(cf. Lakoff and Johnson (1980: 118)) を大脳内活動の結果事象である言語表現から見つめることにある。そして、そのような本性の産物を基盤にして、通常、語句の意味変化は「物理的事象・事物を表示する根源領域から(それよりも)抽象的事象・事物を表示する目標領域への一方向的流れ

に沿って移り変わる」という特性を持つ、と考えられている。以上の学術的観点に立脚すると、まず、3.1.(1)で見たように、軽視事象表示の「look down on NP」は「見下（みくだ）すことは見下（みお）ろすことである」とするような目標領域に転化した比喩表現であり、対象となる二者各々の存在位置の間には抽象的「（存在領域棚が異なる）段差」認識が存在していること、そして、本節で論考したように、そうした抽象的「段差」認識が写像元から構造化されるには、その根源領域における二者間の存在位置の間にも具象的「（存在領域棚が異なる）段差」認識を限定して示し得る力を持つ表現形態でなければならないこと、以上の理由が、「look down at NP」ではなく「look down on NP」を軽視事象表示への比喩転化に至らしめたと考えられるのである。

ただ、最後に、まだ一つの問題が残されたままとなっている。「それでは、その『（存在領域棚が異なる）段差』認識を生じさせるためになぜ on が用いられなければならないのか」という問いについてである。まず、2.2.(6)（以下(10)として再掲）では、“IN CONTACT WITH”を中心に、“ABOVE”、“SUPPORTED BY”との複合概念によってその中核概念が構成されている on の構造を見つめ、

- (10) English *on* in its central sense is a composite of *above*, *in contact with*, and *supported by*. Each of these is an elementary spatial relation.

—Lakoff and Johnson (1999: 31)

次に、2.2.(8)―(9)（以下、それぞれ(11)―(12)として再掲）では、以上の概念的捉え方を踏まえた上で、「TRAJECTOR による LANDMARK への視線の接触」、いわゆる「視線方向の固定化」という考え方を採り上げた。

- (11) [fix [set] one's eyes on NP], [keep an eye on NP] …
- (12) [look on NP], [focus on NP], [concentrate on NP] …

その一方で、こうした従来の意味論的枠組みの中での捉え方だけでは、軽視事象表示の [look down on NP] への比喩転化を引き起こす十分条件には至らないことも述べた。ただし、その形態には「視線の移動」表示が必ず含意されているのだから、「対象物への視線の固定化」とは言わないまでも「視線の接触；密着性」が根源領域とその目標領域との写像を結ぶスキーマとして必要条件の一つになり得ることは疑いようがない。以上の理由から、これを十分条件に昇華させるための試案として「(存在領域棚が異なる) 段差」認識を生じさせる [look down on NP] の概念構造を論考してその成果を導入・活用した。そして、残されるは、同形態の中で on を用いることでその『(存在領域棚が異なる) 段差』認識が引き起こされる知識の枠組み、すなわち、フレーム (FRAME) についての問題である。

その謎を解く鍵もやはり、我々の日常経験から得られる根源領域表示の中に存在しているに違いない。そこで、もう一度、2.2.(3)および前述(6)(以下それぞれ、(3)―(4)として再掲)に目を向けてみよう。

- (3) I was just *looking down on* the lake from the top of the cliff
absentmindedly.
- (4) Have you ever *looked down on* the city from the top of a high building?

いずれも具象的事物の知覚を表示する [look down on NP] が用いられているが、注目すべくは on が従える与格名詞句の指示物の特性である。我々の日常経験を振り返ったとき、見下ろすために高い位置へ自身の存在位置

を移動させるのは、通常、移動前の存在位置では捉え難いほどの一定の大きさをその被知覚物が持つ場合であり、したがって、(13)―(14)でも各々、the lake, the city が宛がわれている。これは、同時に、その被知覚物がそうしなければ捉えられないほどの面積を持っていることを意味している。つまり、「面積」の「面」という言葉からも明らかなように、存在位置の変化後、その AGENT の視覚領域内に捉えられる被知覚物へのプロトタイプの見え方は「面」、すなわち「二次元」の広がりを持つこととなろう。これは、その対象としての与格名詞句指示物が有生物であったとしても、それが多数の場合、それらの存在領域棚とは異なる領域棚に観察者が移動しておく前提がある（ひいてはそれら被観察物が統合されるゲシュタルト知覚によって均等化した「面状」に捉えられ得る）ことに何も変わりはない⁽¹⁶⁾。下記(15)がその実例となる。

(15) Nostalgia Critic: *And I shall be elevated above you in a rocket chair ! In a magnificent rocket chair, so I can look down on all of you and see just how equal we all are !*

—映画 *Kickassia* (2010) <00:30:39> (イタリック体筆者)

言葉を変えれば、それほどの広がりを持った具象的事物を視覚で捉えるためにはより高い存在領域棚への位置変化を要し、それ故に、典型的に被知覚物は二次元的物体として捉えられることになる。この「面状」知覚が生じるには AGENT の存在位置の変化という「(存在領域棚が異なる) 段差」認識が必要であり、逆に、「(存在領域棚が異なる) 段差」認識が前提条件

(16) 本論 2.2.(4)に示されるように、初出例でも抽象的被知覚事物が複数名詞句で表されている。

となるからこそ、「面状」認識が生まれるとも言える⁽¹⁷⁾。このような相関関係が、根源領域表示として「二次元化事物への（視線の）接触」概念を表示する on を用いた [look down on NP] の形態の成立に深く関与していると考えられるのである⁽¹⁸⁾。

他方、言うまでもなく、軽視事象表示に比喻転化を起こした [look down on NP] の与格名詞句指示物にはすでに「面状」の特性は維持されていない。しかしながら、それは与格指示物の具象的対象が通常「一定の広がりを持った二次元的被知覚事物」であったものが、「AGENT の存在位置の変化が前提となって生じる『（存在領域棚が異なる）段差』認識に基づいた視線の下降および被知覚物への視線の接触」のみをスキーマとすることによ

- (17) 以下 [1] に示されるように、具象的段差認識を要しない事象に [look down on NP] が宛がわれる事例も場合によっては存在する。

[1] What are you lookin' at? You look up at the sky, you look down on the ground, but you don't look at me, kid. Got it?

—映画 *Six-String Samurai* (1998) <00:29:18> (イタリック体筆者)
 しかしながら、本論 3.3.(13)–(14) 各々に見られた the lake, the city の指示物とは異なり、AGENT の存在位置をより高い位置に変化させる行為がなくとも、ここでは、現行の位置から「面状」で捉えられる the ground の指示物独自の特性、および、その指示物「全体」（厳密には AGENT の視覚範囲が及ばないほどの広がりを持つ物の全体像）を知覚対象としていない文脈が影響しているに過ぎない。その意味では、具象的事物の知覚を表示する [look down on NP] は、「面状」の知覚が優先され、通常、それを実現化するためには存在領域棚の位置変化を引き起こす「段差」認識が付加的に必要となる、と言えるかもしれない。

- (18) 具象的事物の知覚表示となる [look down] 自体の起源についても、「（存在領域棚が異なる）段差」事象が確認される。以下 [1] がその初出例である。

[1] c1200... c1375 *Sc. Leg. Saints* xxxvii. (*Vicencius*) 326
 Keparis of te presone, tat thru small holis lokit done.
 (現代英語訳: keepers of the prison that looked down through small holes)

—OED (一部省略, 現代英語訳筆者)

り、その対象物が有生物にまで拡張され、「抽象的に AGENT が高い位置からそれよりも低い位置に存在する対象者を見下ろす」という意味変化を生じさせることができた⁽¹⁹⁾と推論される。このような具象から抽象への意味変化過程にあると考えられる事例の一つが以下(16)であり、その抽象的「(存在領域棚が異なる) 段差」概念が顕著に現れた事例が次の(17)―(19)となる。

- (16) Paulie: You've all got your heads up your assholes because love is. It just is and nothing you can say can make it go away because it is the point of why we are here, *it is the highest point and once you are up there, looking down on everyone else*, you're there forever. Because if you move, right, you fall. You fall.

—映画 *Lost and Delirious* (2001) <00:47:44> (イタリック体筆者)

- (17) Kohl suggests that the Irish felt a greater antipathy towards black Americans than they did towards the nativist 'Know-Nothings'; contemporary observers remarked that 'The Irish detested them [blacks] even more than the English or American whites who *looked down on them from a position of social superiority*'.

—*History Ireland* (アクセス日: 2015年8月25日) (イタリック体筆者)

- (18) JC: *I look down on them because I am upper class.*

—TV ドラマ *The Frost Report* (1966) (イタリック体筆者)

(19) 以下 [1] のような比喩的事例の存在も鑑み、「人」とせずに「AGENT (行為者)」と表記した。以下同様。

[1] Winston: I am fond of pigs. Dogs look up to us, *cats look down on us*. Pigs treat us as equals.

—TV ドラマ *Call the Midwife* (2012), Episode: #1.5 (2012)
(イタリック体筆者)

- (19) Zibby: I sometimes feel like I'm *looking down on myself*. *Like there's this older, wiser me watching over this 19-year-old rough draft, who's full of all this potential, but has to live more to catch up with that other self somehow.*

—映画 *Liberal Arts* (2012) 〈01:27:23〉(イタリック体筆者)

なお、このような「(存在領域棚が異なる) 段差」認識による最も高い位置に存在する典型的なものが「神」(もしくは天／宇宙に存在して有生物扱いとなるもの)であり、そこから(その存在領域とは異なる下位世界に存在する)人(々)に視線を送る事象を表示するには、通常、[look down at NP]ではなく、[look down on NP]が好まれることも、本論考の妥当性を物語る言語実例となろう⁽²⁰⁾。下記(20)―(23)として、その実例を挙げておく。

- (20) Isobel: And if you tell me anymore crap about heading towards the light or *looking down on me from heaven* I swear I will kill you myself right now !

—TV ドラマ *Grey's Anatomy* (2005),
Episode: 17 Seconds (2006) (イタリック体筆者)

- (21) Mufasa: Simba, let me tell you something my father told me.

(20) そもそも、具象物知覚表示の [look down on NP] といえども、視覚領域がすでに存在のメタファーを通して概念化され、かつ、「視線の移動」それ自体も物理的に捉えられる可視特性を持たないことから、すでにメタファー化された意味を示す表現形態としてみなすことも可能である。したがって、本論 3.3. (20)―(23)が表すような事象の場合、天地間の落差の関係から、“fall down on the ground”といった具象表示事例に示される「落下」概念も根源領域としてその構造化に少なからず関与している可能性も考えられる。しかしながら、たとえその場合であっても、「面状物(もしくは面状化物)への接触」概念、および、「(存在領域棚が異なる) 段差間の移動」認識が存在していることに依然変わりはない。

Look at the stars. The great kings of the past *look down on us from those stars*.

—映画 *The Lion King* (1994) <00:25:13> (イタリック体筆者)

- (22) Grissom: Abigail, I'm sure if there is something out there, *looking down on us from somewhere else in the universe*, they're wise enough to stay away from us.

—TV ドラマ *CSI: Crime Scene Investigation* (2007),

Episode: Shooting Stars (2005) (イタリック体筆者)

- (23) Sweet Pea: Dear *Lord*, Please forgive us for all the sins we have brought upon us. And *look down upon us* with forgiveness for the the sins we will have in the future.

—映画 *Baby Boy* (2001) <01:43:58> (イタリック体筆者)

3.4. [look up to NP] の概念

最後に、3.3. で論考した [look down on NP] の概念をさらに浮き彫りにするために、通常、その対義表現とみなされることが多い [look up to NP] のそれを観察する。

まず、以下(1)の実例に注目してみよう。

- (1) *I have no worries on my mind, it feels so good to be alive! I look up on the sky, and I can't see a single cloud! Yes it feels so good to be alive...*

—*Scandinavian Soul* (アクセス日: 2015年9月12日) (下線筆者)

上記(1)は、観察者の視覚範囲が及ぼす限りの天空全体が対象化され、「面状化」して知覚されている実例である。そもそも、敬意事象表示における

[look up to NP] の根源領域の経験構造は、[look down on NP] のそれとは異なり、通常、位置変化の力を借りずとも天空全体を眺めることができるが如く、その知覚の前提には「(存在領域棚が異なる) 段差間における観察者の物理的移動」はプロトタイプの必要条件として含意され得ない。一方、我々の日常経験を振り返っても、そうした存在領域棚の段差認識なくして天空などの具象的事物全体を単に面状化して捉えることが常に敬意を伴う知覚であるとも言い難い。事実、次の(2)に示されるように、対象事物が(観察者の存在領域棚と)異なる存在領域棚に位置することが強く意識される場合に限り、典型的な「見下ろす」事象とは対照的な結果がもたらされる。つまり、それを地上から捉えるにはその棚自体が(透明でない限り)観察者の視線移動を妨げる遮蔽物となってしまうのだから、その事物の直接的知覚表示に [look up on NP] および [look up to NP] の形態は適用し得ない。

(2) *Your heart cries out the sadness. . . with every tear you shed*

you cry and cry and cry. . .

'Til spent, you look up through the cloud

And see God's ray of light

—*Whisper of the Heart* (アクセス日: 2015年9月12日) (下線筆者)

ここで、認知言語学研究の原点に立ち返ってみよう。本稿の第一章で述べたように、認知言語学(特に認知意味論)では大脳内活動の一端を明らかにするために、その結果事象である言語事例の概念的側面をあくまでも現象学・情報学のアプローチでもって論考する視座を有する。つまり、種々の言語事例は我々の大脳内活動の結果事象であり、かつ、敬意事象表示には通常 [look up to NP] の形態が用いられるのだから、その概念の発生

には、観察者の存在箇所よりも高く位置する被知覚対象物が視線移動の「到達点 (GOAL POINT)」として捉えられる認識が関与している、という逆算の類推が成り立つ。したがって、本論 2.3. で観察した look と at の結合体によって表示されるような単なる「視線の転換」とは異なり、ここでは「敬意事象表示を誘発する被到達物とは何か」という議論が要求されるに違いない。この論考を踏まえた上で、「敬意事象表示の形態にはなぜ [look up at NP] ではなく [look up to NP] が用いられるのか」という認知のメカニズムを観察していく必要があるが、この議論に移行する場合であっても、その写像元となる根源領域の概念を徹底的に見つめなければならないことに何ら変わりはない。

敬意事象表示における [look up to NP] は、いわゆる「見上げる」という具象行為をその根源領域としたメタファー化表現であることは言を俟たない。まず、知覚事象表示の [look up to NP] は、同事象表示の [look up at NP] と比較して、その使用条件に一定の制限がかかっていると考えられる。たとえば、下記(3)のような文脈では、通常、斜体部分の事象表示には [look up at NP] ではなく [look up to NP] の形態運用がより自然であるとみなし得ることがその論拠の一つとなる。

(3) Eli: *Down on your knees and to him. Look up to the sky and say it.*

—映画 *There Will Be Blood* (2007) <01:53:25> (イタリック体筆者)

ここから推論されることは、知覚事象表示の [look up to NP] が the sky, the moon, the stars といった多分に宗教・信仰心に関係する具象的場所表示の与格名詞句に従える際、観察者はその表示場所の背後に存在する（と信じられている）事物をも意識し、かつ、それに対する敬意認識が関わっている、という視座がそのプロトタイプの運用条件になり得ることである。

それ故、そのような意識・認識のもと、「場所－存在物」という近接関係に基づくメトニミー (METONYMY) のフィルターが機能するとき、「当該事物にまで視線が至る心理的到達点」が知覚事象表示の「look up to NP」の形態を生み出し、いわゆる敬意事象表示への拡張根源となっているという仮説が立つ。このことは、「事物－存在物」という近接関係指示においても並行する。以下(4)がその実例である。

- (4) So humble yourselves and *get on your knees*.

Look up to the cross, He will hear your pleas.

—*Christian Resources.net* (イタリック体筆者)

(アクセス日：2015年9月12日)

逆に言えば、そのような信仰対象への存在意識および敬意認識が関っていない文脈の場合、「look up to NP」の形態は、同じ一点化の場所知覚であっても、そのメトニミカルな存在を感じていない観察者（もしくは信仰の相違などでそうした存在とは関係しない事物に視線を向ける観察者）の態度には適さない、ということになるはずである。事実、次の (5 a-b) の文脈における語用がこの論考の妥当性を物語っている。

- (5) a. Captain Zapp: We have failed to uphold Brannigan's Law.

However I did make it with a hot alien babe. And in the end, is that not what man has dreamt of since first he *looked up at* the stars? You look like a woman who appreciates the finer things in life. Come over here and feel my velour bedspread.

—TV ドラマ *Futurama* (1999),

Episode: Love's Labours Lost in Space (1999)

(イタリック体筆者)

- b. Fry: I never told anybody this, but a thousand years ago I used
to *look up at the moon* and dream about being an astronaut.
I just didn't have the grades, or the physical endurance.
Plus I threw up a lot, and nobody liked spending a week with
me.

—TV ドラマ *Futurama* (1999),

Episode: The Series Has Landed (1999) (イタリック体筆者)

そして、この存在意識および敬意認識が密接に関る最も典型的な事物が「神」であり、(神に対する) そうした観察者の敬意認識の差が下記(6)―(7)の文脈対比として各々 [look up to NP], [look up at NP] の運用の差に現れていることも本知見の証左となろう。

- (6) Joe: No, nothing I ever do is good enough. Not beautiful enough, it's not funny enough, it's not deep enough, it's not anything enough. Now, when I see a rose, that's perfect. I mean, that's perfect. I want to *look up to God* and say, "How the hell did you do that? And why the hell can't I do that?"

—映画 *All That Jazz* (1979) <00:55:52> (イタリック体筆者)

- (7) Lafayette: Do everybody a solid. Instead of *looking up at a god that let all this shit happen*, you need to keep your eyes on your fucking daughter. She ain't right to be

alone.

—TV ドラマ *True Blood* (2008),
Episode: Bad Blood (2010) (イタリック体筆者)

なお、以下(8)のように、一見、そのような存在意識が関っていない与格名詞句を従える根源領域範疇の知覚表示に [look up to NP] の形態が宛がわれる事例も存在するが、この場合であっても、神に祈願するが如く、そこに強く望みを託すという点ではこれまでの視座の拡張に過ぎない。

- (8) Bane: Home, where I learned the truth about despair, as will you. There's a reason why this prison is the worst hell on earth... Hope. Every man who has ventured here over the centuries has *looked up to the light and imagined climbing to freedom.*

—映画 *The Dark Knight Rises* (2012) 〈01:18:30〉
(イタリック体筆者)

3.5. [look down on NP] における概念拡張マップ

以上、本稿 3.2. — 3.4. の論考から得られた [look down on NP] の意味変化プロセスを、以下(1)の概念拡張マップに収束させる形で簡潔に記す。

(1) 「look down on NP」における概念拡張マップ

①「見下ろす」－具象的事物の知覚表示におけるスクリプト；プロトタイプの必要条件

- ・目的：一定の広がりや面積を持つ事物を視覚で知覚する。
- ・前提行為：AGENTが現行の存在位置よりも高い位置に移動する。
- ・結果：被観察物全体が二次元的事物として知覚され、その面状化物にAGENTの視線が接触する。

トリガーとしての拡張スキーマ：

- ・「(存在領域棚が異なる) 段差」認識に基づく視線の下降、および被知覚物への視線の接触

②「見下す」－軽視事象表示への比喩的転化；非同格認識

おわりに

本稿では、実学たる言語学の学術研究成果が如何にして語彙学習指導に寄与し得るのかという一つの可能性を模索してきた。確かに、本稿の論考はあくまでも認知科学研究領域に留まるものであり、何の加工もすることなしにその詳細を教育現場で提示できるものではない。また、高等教育内であっても教養としての英語教育の枠組みではそのまま提示できるものでもない。しかしながら、「なぜ、『見下す』の意を表す [look down on NP] には on が用いられるのですか？」といった声に対して、厳密かつ詳細な捉え方でなくとも、その研究成果を簡潔に生かした以下(1)のような回答を行うだけで、日本語を母語とする英語学習者自身の「自然な経験の相」に沿った理解を推し進められ得るのではないかと考えられる。

- (1) 「[look down on NP] の形態は、本来、『見下ろす』という意味で使われていました。想像してみてください。通常、或る景色全体を見下ろすためには『より高い場所』に移動しないとけません

よね？そのとき、そこからの景色は『面状』に見えませんか？そうした眼下に広がる面状の景色に視線を持っていくことが [look down on NP] の本来の考え方になります。他方、[look down at NP] は必ずしも「観察者がより高い場所に位置する」ことを表すというわけではありません。事実、単に「うつむく」行為を示すには、通常、[look down on NP] ではなく、[look down at NP] が用いられます。したがって、[look down on NP] の『より高い位置から下に視線を向ける』という捉え方の部分だけが活用されて、『人を見下す』といった意味表示の語用が生み出されたのですね。」

本稿も終わりに近づいてきた。最後に、照合フィルターとしての言語学上のさらなる研究役割を見つめる目的があったとはいえ、その題材に [look down on NP] を論考テーマとして選択した背景には筆者自身の経験が存在していることを述べておきたい。高校時代、筆者自身も同表現の形態に疑問を持ち、特に敬意事象表示の [look up to NP] では to が用いられているの対し、なぜ軽視事象表示の [look down on NP] では to にならないのかと心の引っ掛かりを持った次第である。自然言語処理 (NLP) のさらなる発展も見据えつつ、教育分野においても AI 活用の時代が到来しようとする中、少なくとも「なぜ？」に応えるだけの「言語概念を通した論理」の展開は教育者にしか担えず、その橋渡しを行い得る言語学者の使命と責務は重い。自戒の念を込めて言っている。

謝 辞

末筆となりましたが、福井工業大学入学直哉先生（英語学）には古英語の知識に関するご指導を賜りました。福森雅史博士（認知言語学、ロマンス語学）、福井工業大学 小山政史先生（応用言語学）、京都産業大学 阿武尚人先生（認知言語学・英語教

育学)には拙稿の隅々までお目通し頂き、貴重なご助言ばかり頂きました。また、日羅教育科学協会 Oana MORIYAMA 氏(教育学・心理学)には他言語における同概念表示との異同を共に検討して頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

参考文献²⁾

【学術図書・学術論文】

- Anno, N. (2014) “A Cognitive Linguistic Approach to ESP Education: in the Case of English Business Terms,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 6, 115–122. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. New York: Longman.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Special Technical Report, Massachusetts Institute of Technology. Research Laboratory of Electronics, No. 11. Cambridge: M.I.T. Press.
- Cook, W. A. (1969) *Introduction to Tagmemic Analysis*. (Transatlantic series in linguistics) New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Fillmore, C. J. (1968) “The Case for Case.” in Bach, E. and Ro.T. Harms, (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. 1–88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Grice, H. (1989) *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University Press.
- Gruber, J. S. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. Amsterdam: North Holl.
- Halliday, M. A. K. (1977) *The Linguistic Sciences and Language Teaching*. (Longman Linguistic Library) New York: Longman.
- Hjelmslev, L. (1969) *Prolegomena to a Theory of Language*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Jespersen, O. (1984) *Analytic Syntax*. Chicago: University of Chicago Press.
- Koyama, M. (2015) “The Influence of Linguistic Distance on Language Learning,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 1, 24–29. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Kruisinga, E. (1931) *A Handbook of Present-Day English*, Vol. 4. P. Groningen: Noordhoff.

²⁾ TV Dramas ならびに Film DVDs について、邦題が存在する場合にのみそれらを記すこととする。

- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Lamb, S. M. (1966) *Outline of Stratificational Grammar*. Washington D.C.: Georgetown University Press
- Langacker, R. W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. New York: Mouton de Gruyter.
- Levi, J. (1986) “Applications of Linguistics to the Language of Legal Interactions.” in Peter, C. and V. Raskin. (eds.) *The Real-World Linguist: Linguistic Applications in the 1980s*, pp. 230–265. Norwood: Albex.
- Moriyama, O. (2006) *Influența Mass-mediei asupra Comportamentului Adoleșcentului*. Brașov: Universitatea Transilvania: Facultatea de Psihologie și Științe ale Educației.
- Moriyama, O. (2015) “A Pedagogic Approach to Japanese Culture: through the Animated Film *Spirited Away*,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 1, 104–108. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, O. (forthcoming; 2018) “A Cognitive Approach to English-vocabulary Education: through the Concepts of Synonymic Expressions,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 4. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2011) “A Cognitive Teaching Way for Japanese Students: through the Concepts of English Prepositions,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 2, 17–24. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2011) “A Cognitive Study of English Education through Cultural Frame: from a Comparative Perspective with Japanese Identity,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 3, 98–108. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2012) “Language-Culture Education for Developing the International Bridge between Romania and Japan: from a Didactic Perspective upon Cognitive Linguistics,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 4, 21–31. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2013) “Nation and Language,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 5, 45–55. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural As-

- sociation; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2014) “A Pedagogic Approach to the Innovation of Global Studies’ System at the International Course and the English Seminar of Kinki University: along with the UNESCO’s Recommendation concerning International Education,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 6, 8–18. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2015) “A Cognitive Approach to Japanese Popular Culture: through the Love Songs of Koji TAMAKI,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 1, 82–87. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2016) “A Basic Study of Cognitive Script concerning Artifical Intelligence: through the Concepts of Information-Technology Expressions,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 2, 29–34. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (2017) “A Basic Study of Cognitive Script concerning Artifical Intelligence: through the Concepts of CONSCIOUSNESS-MEMORY Expressions,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 3, 83–88. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T. (forthcoming; 2018) “A Basic Study of Cognitive Script concerning Artifical Intelligence: through *KANSEI* Communication,” in Oprescu, E. et. al., *Omul și Universeul*, Vol. 4. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T., O. Moriyama et al. (2012) *Soarele* (『太陽』), Vol. 1. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Moriyama, T., M. Koyama, O. Moriyama et al. (2012) *Soarele* (『太陽』), Vol. 2. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Okuno, T. (2014) “A Cognitive-Linguistic Analysis of the English Preposition ON,” in the *Bulletin of the Faculty of Education*, 112, 71–79. Hirosaki University.
- Poutsma, H. (1928) *A Grammar of Late Modern English*, Part I. 2nd ed. Groningen: P. Noordhoff.
- Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics: Concept Structuring System (Language, Speech and Communication)*. Cambridge: MIT Press.
- Ungerer, F. and H. J. Schmid (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*.

New York: Longman.

- 安藤貞雄 (2012) 『英語の前置詞』. 開拓社: 東京.
- 池上嘉彦 (1975) 『意味論 意味構造の分析と記述一』. 大修館書店: 東京.
- 上野義和・森山智浩 (2003) 『イメージ&カテゴリーの英単語』. かんぼう: 東京.
- 上野義和・森山智浩 (2007) 「イメージとカテゴリーによる語彙指導方法の構造改革 (その 6) —中学校・高等学校における和訳偏重主義への新提案: 多義性のメカニズムと認知言語学導入の研究意義—」『研究論叢』68号, pp.1-26, 京都外国語大学国際言語平和研究所.
- 上野義和・森山智浩 (2012) 「異言語教育と言語文化 (その 4) —メタファー研究の再考と言語文化教育の展開—」『京都外国語大学研究論叢』第79号, pp.1-21. 京都外国語大学国際言語平和研究所.
- 上野義和・森山智浩他 (2002) 『認知意味論の諸相—身体性と空間の認識—』. 松柏社: 東京.
- 上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 (2006) 『英語教師のための効果的語彙指導法—認知言語学的アプローチ—』. 英宝社: 東京.
- 大西泰斗・マクベイ, ポール (2006) 『NHK 3 カ月トピック英会話 ハートで感じる英文法』. 日本放送出版協会: 東京.
- 大西泰斗・マクベイ, ポール (2009) 『大西泰斗のイメージ文法』. 株式会社DHC: 東京.
- 小西友七 (1955) 『前置詞 (下)』 (英文法シリーズ19). 研究社: 東京.
- セイン, デイビッド・古正佳緒里 (2014) 『ネイティブが教える英語の動詞の使い方』. 研究社: 東京.
- 田中茂範 (1993) 『英単語ネットワーク・前置詞編』. アルク: 東京.
- 福森雅史 (2011a) 「図地分化と容器のメタファーに見る「自己」の概念研究」 (その 1) —英語, スペイン語の異言語対照を中心に—」『文学, 芸術, 文化』第22巻第2号, pp. 111-145. 近畿大学文芸学部.
- 福森雅史 (2011b) 「図地分化と容器のメタファーに見る「自己」の概念研究」 (その 2) —英語, スペイン語の異言語対照を中心に—」『文学, 芸術, 文化』第23巻第1号, pp. 41-95. 近畿大学文芸学部.
- 村田勇三郎 (1982) 『機能英文法』 (英語学叢書). 大修館書店: 東京.
- 毛利可信 (1980) 『英語の語用論』 (英語学叢書). 大修館書店: 東京.
- 森山智浩 (2008a) 「言語教育への語彙概念導入研究—身体経験から現れ出る空間関係づけ概念への認知言語学的アプローチ—」『太成学院大学紀要』第10号, pp. 163-178. 太成学院大学.
- 森山智浩 (2008b) 「英語動詞 take に見る多義性の拡張メカニズムと言語教育—認知言語学的アプローチによるメタ・プロセス理論を通して—」『近畿大学英語研究会紀要』第2号, pp. 79-98. 近畿大学英語研究会.
- 森山智浩 (2015) 「[Enter into NP] の概念研究—認知言語学的アプローチ—」

- 『近畿大学 法学』第62巻第3・4号, pp. 187-245. 近畿大学法学会.
- 森山智浩 (2016) 「[Depend on NP] の概念研究 ―認知言語学的アプローチ―」.
『文学, 芸術, 文化』第28巻第1号, pp. 23-69. 近畿大学文芸学部.
- 森山智浩・高橋紀穂・森山オアナ 他 (2010) 『英語前置詞の概念 ―認知言語学・
教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から―』(FD 語学教育改革
シリーズ1). ブイツーソリューション: 愛知.
- 森山智浩・中桐謙一郎・福森雅史・小山政史・森山オアナ (2012) 『Let's Vocabucize
1000! ―イメージと映画で学ぶ英単語総合演習帳―』. 松柏社: 東京.

【Dictionaries】

- [ADEIE] マケーレブ, ジャン (編) 『英和イディオム完全対訳辞典』. 朝日出版
社: 東京.
- [DEWI] 政村秀實 (2002) 『英語語義イメージ辞典』. 大修館書店: 東京.
- [GEJD] 小西友七・南出康世 (編) (2002) 『ジーニアス英和大辞典』. 大修館書
店: 東京.
- [KDEE] 寺澤芳雄 (編) (1999) 『英語語源辞典』. 研究社: 東京.
- [LDCE] Quirk, R. (ed.) (1987) *Longman Dictionary of Contemporary English*.
London: Longman.
- [OALD] Hornby, A. S. (ed.) (1995) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. London:
Oxford University Press.
- [OED] Burchfield, R. W. (ed.) (1978) *The Oxford English Dictionary*. Ox-
ford: Clarendon Press.

【TV Dramas】

- Call the Midwife* (2012), Episode: #1.5 (2012).
- Cheers* (1982), Episode: Let Me Count the Ways (1983).
- CSI: Crime Scene Investigation* (2000) (邦題: 『CSI: 科学捜査班』), Episode: Shoot-
ing Stars (2005).
- Frost Report, The* (1966).
- Game of Thrones* (2011) (邦題: 『ゲーム・オブ・スローンズ 第一章: 七王国戦
記』), Episode: 17 Seconds (2006), Episode: Lord Show (2011).
- Grey's Anatomy* (2005) (邦題: 『グレイズ・アナトミー 恋の解剖学』), Episode:
Owner of a Lonely Heart (2005).
- Justice League* (2001) (邦題: 『ジャスティス リーグ』), Episode: Divided We
Fall (2005).
- Star Wars: The Clone Wars* (2008) (『スター・ウォーズ/クローン・ウォーズ』),
Episode: Shadow of Malevolence (2008).
- Sikeurit Gadeun* (2010), Episode: One (2010).

【Film DVDs】

- All That Jazz* (1979) (邦題：『オール・ザット・ジャズ』). Columbia Pictures.
Baby Boy (2001) (邦題：『サウスセントラル LA』). Columbia Pictures.
Back to the Future (1985) (邦題：『バック・トゥ・ザ・フューチャー』). Universal Pictures.
Dark Knight Rises, The (2012) (邦題：『ダークナイト ライジング』). Warner Brothers.
Futurama (1999) (邦題：『フューチャラマ』), Episode: Love's Labours Lost in Space (1999), Episode: The Series Has Landed. (1999). The 20th Century Fox Television.
In a Lonely Place (1950) (邦題：『孤独な場所で』). Columbia Pictures.
Kickassia (2010). Channel Awesome.
Liberal Arts (2012) (邦題：『恋するふたりの文学講座』). BCDF Pictures.
Lion King, The (1994) (邦題：『ライオン・キング』). Walt Disney Pictures.
Lost and Delirious (2001) (邦題：『翼をください』). Cite-Amerique.
Six-String Samurai (1998) (邦題：『シックス・ストリング・サムライ』). HSX Films.
There Will Be Blood (2007) (邦題：『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』). Paramount Vantage.
True Blood (2008) (邦題：『トゥルーブラッド』), Episode: Bad Blood (2010). Your Face Goes Here Entertainment.

【Websites】

Christian Resources.net

URL: <http://www.christian-resources.net/christian-poems.html>

History Ireland

URL: <http://www.historyireland.com/18th-19th-century-history/fighting-for-lincoln-irish-attitudes-to-slavery-during-the-american-civil-war/>

Scandinavian Soul

URL: <http://www.scandinaviansoul.com/reviews/single-reviews/sunshine-and-butterflies-klara-kazmi>

TOSHIN TIMES on Web, 「憧れの職業を追い！言語学者編」

URL: <http://www.toshin.com/news/job/0702.php>

Whisper of the Heart

URL: <http://heartwhispers.weebly.com/grief.html>